

# 中世平塚のものものもの

武士主導の政治が行われた鎌倉時代。当時、平塚を含めた東国は一大開拓地でした。広大な原野に恵まれ、馬を放牧するのに適していたため、牧の管理者から武士になった者も少なくありません。

今回は、平塚の武士の中でも岡崎義実・真田与一親子と土屋宗遠らの足跡をたどります。お城が好きで市博物館の通称「城ラー」栗山雄揮学芸員による城解説も併せて紹介します。

岡崎博物館 33-5111



鉄製。高さ約25センチ、長さ約34センチ。

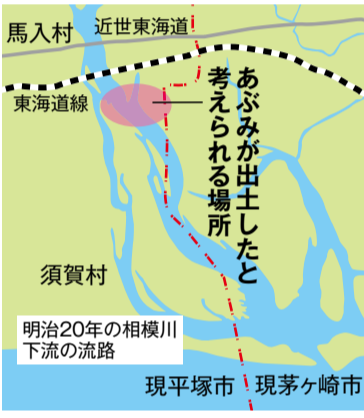
## 鎌倉時代のあぶみ

### 頼朝落馬の馬入川で発見

「弓馬の士」とも呼ばれる武士。馬と武士には深いつながりがあります。あぶみとは、馬に乗るときに足を載せる部分で、乗馬には欠かせない道具の一つです。あぶみを付けると馬上でのバランスが取りやすくなるので、馬に乗ったまま戦うことができました。

今回公開されるあぶみは踏込み部分が長い「舌長あぶみ」という種類です。踏込みが深く、安定性や動きやすさを重視して作られています。これは平安時代から見られる形で、武家を中心に使われていました。同じような形のあぶみが東京国立博物館と東京都青梅市の御嶽神社にもあり、どちらも鎌倉時代のもといわれています。

あぶみは昭和15年ごろに相模川に架かる馬入鉄橋の下流(左図)、周辺



一帯が馬入川と呼ばれる場所で見られました。平成16年に博物館に寄贈され、調査を進めていました。

相模川の中央に位置する相模川は、古くから鎌倉と西国とをつなぐ交通の要衝でした。鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」にも、文治4年(1188年)1月20日に三浦義澄が相模川に浮橋を架けたという記録が残っています。

広範囲に分流する相模川は、年代

源頼朝が相模川で落馬したという話が、馬入川の名前の由来とされています。



## 平塚の三大武士団

### 平塚は相模国の中心

このあぶみが使われていた鎌倉時代は、平塚でも武士が館を構えていました。

鎌倉幕府を樹立して武士による統治を打ち立てた源頼朝。彼に協力したのは、主に東国の武士でした。

平塚では岡崎義実、真田与一(岡崎義忠)、土屋宗遠らが頼朝の挙兵

によって形が変わっています。鎌倉時代の正確な川の形は特定できていませんが、あぶみを見て、人や馬が行き交った昔の相模川を想像するのも情趣がありますね。

### 実用品が残るまれな事例

鎌倉時代の鉄製の舌長あぶみは、発見例が極めて少ないものです。あぶみは実用的な道具で消耗がとて激しかった上、消耗した場合は鉄材として再利用されたためです。

あぶみを鞍につるための「鉸具頭」は引きちぎられたように欠けており、これは実際に使われるうちに破損したと考えられます。現存する舌長あぶみの主な例は、神社に奉納されたものや武家に宝物として伝わっているものがほとんどです。今回のように、実際に使用されたものが発見されるのは大変珍しい事例です。

時から参戦しており、吾妻鏡の治承4年(1180年)の8月20日の記述などに、彼らの名前を見ることができま

現在の神奈川県で、武士団の中心的な役割を果たしたのは三浦一族、中村一族、鎌倉党です。この中で、最も大規模な武士団は三浦一族です。三浦半島を拠点に、東は房総半島、西は相模国の中央部までと、

年(西暦)	主なできごと
保元元 (1156)	保元の乱 後白河天皇と崇徳上皇が対立。後白河天皇側の平清盛と源義朝が勝利した
平治元 (1159)	平治の乱 清盛と義朝が対立。清盛が勝利した後に義朝は死亡した
永暦元 (1160)	義朝の子・頼朝が伊豆に流される
治承3 (1179)	清盛が京都を制圧し、後白河天皇を幽閉する
治承4 (1180)	後白河天皇の第三皇子・以仁王の平氏追討の令旨を受けた後、頼朝が挙兵する
文治元 (1185)	頼朝が伊豆目代山木館を襲撃。岡崎義実・真田与一・土屋宗遠らに参戦する
文治2 (1186)	頼朝が伊豆から相模土肥郷に赴く。土屋宗遠・同義清・同忠光・岡崎義実・真田与一・豊田景俊らが随行する
文治6 (1190)	石橋山の戦いで頼朝が大庭景親に敗れる。真田与一が戦死する
建久3 (1192)	土屋宗遠が甲斐国に赴く
建久6 (1196)	頼朝が佐竹秀義の籠る常陸金砂城を攻略。土屋宗遠が参陣する
文治6 (1190)	屋島の戦い、壇ノ浦の戦いで平氏滅亡
文治6 (1190)	平宗盛らが唐ヶ原を通り、相模川を渡って鎌倉に護送される
文治6 (1190)	岡崎義実が預かった平盛国が没する
文治6 (1190)	真田与一の墓前で頼朝が涙する
建久3 (1192)	頼朝が征夷大将軍となる
正治元 (1199)	頼朝没。北条氏に実権が移る
正治2 (1200)	岡崎義実没
建保6 (1218頃)	土屋宗遠没(推定)